

# Katherine Paterson の *Lyddie* にみる 曖昧なフェミニズム

吉 田 純 子

## はじめに

アメリカのキャサリン・パターソン (Katherine Paterson, 1932-) のヤングアダルト小説『ワーキング・ガール—リディの旅立ち』(*Lyddie*, 1991) は、彼女の書いたもっともフェミニズム的な作品であると言われている<sup>1</sup>。小説は、三人称の語り手が主人公リディ・ウォーセン (Lyddie Worthen) を焦点人物 (focalizer)<sup>2</sup>として、さまざまな暗喩を効果的に駆使して、彼女がフェミニストの主体を構築するプロセスを物語る。とりわけ、貧困、搾取的な産業資本、性差別の暗喩として彼女の主体を脅かす「熊」が全編を通じて用いられ、その結果、脅威に対抗する彼女の主体は、堅固に構築されることになる。

しかし、リディが人生の選択について決断する結末部をつぶさに調べてみると、それまでの話の流れから、断固としたフェミニズム的決断をリディに期待する読者にとって、彼女の主体構築には一抹の曖昧さがみられる。彼女は、自分を陶冶してきた「熊」を、実体を失い内面化した敵（「内なる敵」）として認識する。ロバータ・S・トライツ (Roberta S. Trites) は、外的な「熊」に直面することから内的な「熊」を睨むという暗喩の変化についてのリディの発話を取りあげ、そこに「曖昧なフェミニズム」(“ambivalent feminism”) がみられると主張する。トライツは、その原因をこの作品が発表された1990年代アメリカのフェミニズム運動内の混乱や自己分裂——作者パターソン自身のそれも含む——に求めている (“Feminist Dialogics” 50–51)。

本稿は、トライツのこのような理由付けに反論して、まず、思春期小説『ワーキング・ガール』をフェミニズム小説として成立させている条件を検討し、次に、語り手パターソンがこの物語の視点である焦点人物リディをフェミニストの主体に構築するプロセスを調べ、最後に、結末部で、なぜ曖昧なフェミニストの主体が作られたのかを考察する。

### 教養小説として

『ワーキング・ガール』は、主人公リディが数々の苦難を乗り越えて、教育や職業や伴侶を得るまでの成熟過程を物語るのもので、教養小説（Bildungsroman）でもある<sup>3</sup>。そこで、まず、教養小説の定式について説明し、少女を主人公とする教養小説の問題点に触れておきたい。

ジェームズ・バックリー（James Buckley）は、教養小説を次のように説明する。感受性の鋭い子どもが田舎を舞台背景にして、家族全体、とりわけ父親に息苦しさを感じながら成長する。少年がそう感じるのは、夢に描く生活を父親に理解してもらえないからで、学校も主人公にとって自由のない場であり、そのため少年は、自立を求めて都会に出て行く。これ以降、キャリアへの準備だけではなく、都会生活の実体験という意味においても、真の教育が始まる。この実体験には、二種類の性的な出会いが含まれる。一つは彼を墮落させる体験、もう一つは彼の価値を見直す喜ばしい体験である。魂の遍歴をへて自己洞察力を増し、子どもからおとなへの通過儀礼を済ませると、彼は、自分の成功した姿や成長ぶりを故郷の人に見せる（*Seasons of Youth* 17-23）。

また、バーバラ・ホワイト（Barbra White）の教養小説の定義は、次のように、もっと簡潔なものである。「主人公は、家庭の制約を拒んで世の中へ探求の旅に出て、邪悪な人生観も含め異なる世界観をもつ導き手に出会い、そして、多くの挫折を経験してようやく正しい世界観、結婚相手、職業を選択する」（*Growing Up Female* 3）。

しかし、伝統的教養小説には男性中心的なところがあって、男の主人公の定

式が女性には適用できないという問題が指摘されている<sup>4</sup>。アニス・プラット (Annis Pratt) は、その問題を次のように説明する。

女性の発達を描く小説で、(中略) 主人公は、問題を意識的に熟考したうえで、社会の一隅で生きる選択をするのではない。彼女は、性別役割の規範によって、むしろ物語の最初から徹底的に疎外されている。こうして、作者は、主人公の教養 (Bildung) または成長を、このジャンルの標準のパターンにあてはめようとするが、これまで述べてきたジェンダー間の分断のせいで、必然的に、女性の加入儀礼は、成熟に向かって断固として進むよりも、おとなの人生をせいっぱい生きることから逃げるものとなる。(中略) あきらかに、作家たちは、成長期の女性が補助的または第二次的な人格をもつか、犠牲者か、狂人か、死者かのいずれかであると考えているようだ。(Archetypal Patterns in Women's Fiction 36、強調は筆者による)

プラットの批判を『ワーキング・ガール』に向けると、主人公リディは、(自分の意思からというより) 貧困に追いやられて家を出るのだが、結末部において誰かの犠牲になるとか、発狂するとか、死ぬという結果に至りつかない。むしろ、バックリーやホワイトの定式に近い形で物語が進行する。『ワーキング・ガール』は、次のようなプロットとなる。ヴァーモントの農村に暮らすリディは、感受性の鋭い13歳の少女として登場する。彼女は、家出した父親に代わり、精神を病んだ母親を支え、3人の弟妹たちの世話をしながらヴァーモントの農場を切り盛りする。しかし、母親は、病状が悪化して家を出る。リディは、家を借金の形に取られ、借金を返済するために弟チャールズ (Charles) とともに徒弟奉公に出され、その後、ローウェルの紡績工場で働くようになる。この町で、彼女は、教養小説に典型的な二種類の経験をする。すなわち、家族再会のために工場での仕事量を増やし寸暇を惜しんで働き、しだいに守銭奴と

なってゆく。いわゆる「幸いなる過ち」(“Fortunate Fall”)<sup>5</sup>と呼ばれる魂の零落状態に陥る。その一方で、工場や寮の娘たちと親しく交流し、文字を習い覚え、今までよりも広い世界で、知的な刺激を得るという経験ををする。また、二つの性的な出会い——一方で、職場の上司マーズデン氏 (Mr. Marsden) から性的嫌がらせを受け、他方、ルーク・スティーヴンズ (Luke Stevens) から求婚される——を経験する。その後、家族の問題や経済問題の解決をみたりディは、求婚者ルークとの将来的な結婚を視野に入れながら、まず、オハイオ州のオーバーリン大学への進学を決意する。物語はここで終わる。このように『ワーキング・ガール』は、少女を主人公とする教養小説でありながら、プラスの主張するような、「犠牲者か、狂人か、死者かのいずれか」といった結末を迎えてはならない。

### 歴史小説として

『ワーキング・ガール』は、1840年代アメリカのヴァーモント州の田舎と、マサチューセッツ州の紡績の町ローウェルとを舞台とする歴史小説で、1991年のヴァーモント200年祭の「女性史プロジェクト」参加作品として書かれた。パターソンは、本書の謝辞やエッセイで書いているように、1年近くの間、歴史資料を集め、関係する博物館を2度以上訪問し、1840年代の新聞や雑誌を調べ、ローウェルの紡績工場の女性労働者の手紙を読み、歴史小説にふさわしい準備をした上で執筆に臨んだ<sup>6</sup>。パターソンは、特に、ヴァーモントの農家出身の少女たちの手紙や手記を読んで、次のような感想を述べている。「ヴァーモントの農村からローウェル、マサチューセッツに働きに出た少女の手紙が音読されるのを聞いて、私はこの作品の構想を思いついた。その手紙に、私は鳥肌がたったのだ」(“Historical Fiction” 1430)。パターソンは、少女たちの手紙にリアリティを感じ、作家として彼女たちに「声」を与えたのである。こうして、正確な史実に基づいた歴史小説において、パターソンは、架空の人物りディのフェミニスト的主体を形成していった。

さて、歴史小説『ワーキング・ガール』は、産業革命期のモデル工場といわれたローウェル工場が女工を搾取するさまを描き、女工たちと黒人奴隷との間に搾取労働という点で共通項を描き出し、教養小説の域を超えて、物語を政治化 (politicize) する。

そこで、この作品を歴史的文脈においてみよう。リディが働き始めた1844年のローウェルの紡績工場では、イーデイス・H・アルトバック (Edith H. Altbach) によると、「それまでごく散発的な抗議行動を繰り返していた工場の女子労働者も、次第に闘争性を増し、ストライキを敢行し、より恒久的な組織を結成するようになった」(『アメリカ女性史』60)。1841年から1845年までの間、ローウェル工場の熟練工たちが編集した工場新聞『ローウェル・オフアリング』誌 (*Lowell Offering*) には、「白人奴隷」になりたくない、と搾取労働に不満を募らせる Ellen なる女性の声も掲載されている<sup>7</sup>。

さらに、作品『ワーキング・ガール』において、リディやそのルームメイトのベッツィ (Betsy) がたびたびオハイオ州のオバーリン大学を言及し、結末部で、リディがこの大学への進学を決意するのは、フェミニズム観点から興味深い。作品では、この大学が女子専門学校 (seminary) ではなく、男女共学の大学であると書かれている。

歴史的に、オバーリンは、奴隷制廃止運動と女子教育の拠点となった町である。オバーリンは、1850年代のアメリカで、もっとも人種差別の少ない町だった。自由黒人、解放された黒人、逃亡奴隷の黒人が町の人口の20%を占めていた。町には少なくとも4つの「地下鉄道」の支部があった (Zaidman, "Historical Authenticity" 179)。また、1833年に創立されたオバーリン大学は、翌年に女子専門学校レベルの女子学部を設置し、1837年には完全男女共学体制に移行して、それまで男子専用の学部で4名の女子学生の入学を認めた。そして、1841年には、全米で初めて、男女共学の大学として3名の女子を卒業させた<sup>8</sup>。つまり、リディが進学を決意した1845年のオバーリンは、奴隷制廃止運動や女性の権利獲得運動と強いかわりをもつ町であったのだ。

### 主体構築過程の暗喩―「熊」

『ワーキング・ガール』では、主人公リディの主体構築の表象として、「熊」「奴隷」「蛙」といった暗喩が効果的に使われている。そこで、これらの暗喩を用いた表現を詳しくみてみたい。

この作品は、1843年11月にリディたちの小屋に熊が侵入する事件で始まる。熊は大暴れしたすえ小屋から逃げていくが、母親は、これが地上に悪魔の現れる兆候だと盲信して、リディと弟チャールズを残し、赤ん坊と少女を連れて家を出てしまう。こうして熊は、一家離散の契機となったばかりか、その後のリディの人生に何度も脅威、困難の象徴として登場しつづける<sup>9</sup>。貧困に駆られて都会に出た彼女は、崩壊した家族を親代わりに回復しようと苦闘するなかで、暗喩的な「熊」と闘う。「熊」とリディとの関係性は、彼女の成熟過程において、三段階にわたって変化する。

まず、リディは、ローウェルの町で暗喩的な「熊」に出会う。彼女がローウェルの町に到着して都会の風景を見たとき、紡績工場の寮で騒々しい初めての朝を迎えたとき、そして、紡織機の喧噪音のなかで工場に足を踏み入れたとき、彼女が目にする情景は、威圧感、恐怖心を抱かせる「熊」として表現される(51, 52, 59, 62, 75)。言い換えれば、田舎娘リディは、高い建物の建ち並ぶ都市での生活や産業革命期の機械を目にすると、それらが彼女の主体を脅かす「熊」であると感じて、「熊」を睨みつけ、負かされまいとする(75)。

しかし、第二段階での「熊」との関係性にはいると、「熊」は、リディの睨みだけでは制御しがたい存在となる。たとえば、次のようにリディは、担当の織機数を増やし、長時間労働に耐えながら労賃を稼ぐうちに、しだいに人間的な感情を失い「熊」である織機に一体化してゆく。

No matter how fast the machines speeded up, Lyddie was somehow able to keep pace. She never wasted energy worrying or complaining. It was almost as if they had exchanged natures, as though she had become the

machine, perfectly tuned to the roaring, clattering beast in her care. *Think of them as bears she'd tell herself. Great, clumsy bears. You can face down bears.* (97, 強調は筆者による)

この段階のリディは、みずからが機械となることで、かろうじて「熊」である機械と闘えろと考え、ひたすら工場の課すノルマを従順にこなす。

さらに、「熊」は、職場での対人関係や家族の問題が再燃すると、制御不能状態に陥る。それは、彼女のみる悪夢に表現されている。

In her uneasy sleep she saw the bear again, but suddenly, in the midst of his clumsy thrashing about, he threw off the pot and was transformed, leaping like a spring buck up into the loft where they were huddled. And *she could not stare him down*" (126, 強調は筆者による)

リディたちが避難していたロフトにまで侵入してくる熊に象徴されるように、「熊」は、リディにとって、制御不能な脅威となっている。

第三段階の「熊」の表象は、工場を解雇されたリディが“The bear had won” (169) と敗北宣言をし、闘う相手を喪失したとき、内面化した「熊」(内なる「敵」)として現れる。しかも同じ頃、農場と家が売却され、弟と妹の養父母が決まったことで、彼女は、借金返済と家族再会というそれまでの人生の目標を喪失し、賃金を稼ぐことに空しさを感じる。この段階でのリディは、自己洞察力を増しており、魂の零落状態に陥っていた自分を、内なる「熊」と認識するようになる。

そこでリディは、求婚者ルークに、内なる「熊」を睨みつけるためにオーバーリン大学にいくと告げる。

“I'm off . . .” she said, and knew as she spoke what it was she was off to. To stare down the bear! *The bear that she had thought all these years was*

*outside herself, but now, truly, knew was in her own narrow spirit. She would stare down all the bears!*" (181, 強調は筆者による)

言いかえれば、この段階の「熊」は、工場の機械でも、労働者を搾取する企業でもなく、むしろそれらと一体化して人間性を疎外された「彼女自身の偏狭な魂」のなかに存在する、というのである。

### 主体構築過程の暗喩—「奴隷」

リディは、作品全編を通じて、みずからが「奴隷」なのかどうかの自己認識の悩みを抱えている。彼女は、年季奉公先のカトラー旅館の門をくぐるとき、初めて悩みに直面する。*"Once I walk in that gate, I ain't free anymore, [Lyddie] thought. No matter how handsome the house, once I enter I'm a servant girl —no more than a black slave"* (18, 強調は筆者による)。彼女の週給50セントは、母親に送金され、リディの手元には1セントも残らない。事実上の奴隷生活である。夜は窓のない通路で眠り、早朝から深夜まで働き、自分たちの仔牛を売って得た25ドルを暗やみのなかで数えることが唯一の楽しみとなる。

やがて、リディの「奴隷」という自己認識は、逃亡奴隷エゼキエル・フリーマン (Ezekial Freeman) との出会いによって増幅される。エゼキエルから、彼女も「奴隷」の一人であると示唆されると、最初、彼女は、ヴァーモント州の自由市民であって奴隷ではないと反発する。しかし、エゼキエルの教養ある言動に感銘をうけると、*"At Cutler's, . . . she was no more than a slave."* (43) との自己認識を新たにする。そして、カトラー旅館を解雇された彼女は、エゼキエルにならって、*"I'm free. . . I can do anything I want. . . A person should walk to freedom."* (45) と言って、ローウェルの町を目ざす。

だが、女工になってよく稼ぎ、自由を得る、というリディの目標には、矛盾が潜んでいた。つまり、稼ぎがよくなればなるほど、彼女は機械への隷属状態



に陥る。したがって、ローウェルでもリディは、「奴隷」の自己認識に関して葛藤を経験する。労働時間削減の嘆願運動をする先輩の紡績工ダイアナ・ゴス (Diana Goss) や、寮のルームメイトのベッツィが搾取労働の不満をもらす。とくに、ベッツィは、パロディの労働運動歌 “I cannot be a slave.” (92) を歌いながら、女工が黒人奴隷のように働かされていると訴える。ところが、機械の奴隷となってしまったリディは、次のように、自分が搾取されていることを認めようとしない。“She *wasn't* a slave. She was a free woman of the state of Vermont, earning her own way in the world” (94).

リディは、結末部の求婚者ルークとの別れの場面で、再び認識の変化を表明する。自分が他人や組織の「奴隷」だったのを認め、今後は自分自身の「奴隷」にもなるまいと決意する。“I won't come back weak, and beaten down and because I have nowhere else to go. No, I will not be a slave, even to myself—” (182).

### 主体構築過程の暗喩—「蛙」

最後に、リディの主体構築にかかわる暗喩的表象として、「ミルク桶に落ちた蛙」があげられる。リディは、カトラー旅館の料理女トリフェーナ (Triphena) からミルク桶に落ちた二匹の蛙の話聞く。一匹は溺死し、もう一匹は溺れまいとしてミルクを蹴りつづけてバターに変え、生きのびたというのである。この話を聞いたリディは、「私たち、まだ、跳ぶことができるのね」 (“We can stil hop” 28) と大笑いする。この文章は、リディが弟チャールズと共有するジョークの一つである。かつて、ほとんど読み書きのできない母親の手紙に、「私たちには、まだ希望がある」 (“We can stil hop” 9) という意味の文章をみつけ、リディとチャールズは、「まだ、跳ぶことができる」というジョークに解釈したことがあった。「ミルクを蹴りつづける蛙」は、男の「奴隷」になるまいと独身をとおすトリフェーナや、家族との再会を願って年季奉公をするリディの不屈の生き方を表している。

したがって、「奴隷」の暗喩は、希望 (hope) や跳躍 (hop) と関連して使われる。たとえば、リディは、逃亡奴隷エゼキエルと出会う場面で、教養ある言動を示すエゼキエルとの対話を通じて、心境の変化を経験し、とっさに、全財産の25ドルを逃走資金として彼に与えてしまう。

“I *hope* you get to Canada safe,” she said. “And I *hope* your family can join you real soon.” And then, without even thinking, she thrust her hand into her pocket and held out to him the calf-money bag. “You might need something along the way,” she said. . . . “I *hope* you find your freedom as well, Miss Lydia,” he said. (43, 強調は筆者による)

この一節での「願い」(hope) は、ふたりが互いに隷属状態から自由になるように願うと同時に、それが自由への「跳躍」(hop) でもあることを示唆している。

#### エイジェンシー 主体行為力としてのリテラシーと「声」

『ワーキング・ガール』が「リテラシー物語」(主人公が読み書き能力を獲得する物語) であるという読みがリンダ・ベンソン (Linda Benson) によってなされている<sup>10</sup>。リテラシー能力の低いリディは、ルームメイトのベッツィが読み聞かせる『オリバー・ツイスト』(*Oliver Twist* 1839) を通じて、物語世界の豊かさと喜びに目覚める。

She was so hungry to hear the story again that, exhausted as she was after her thirteen hours in the weaving room, she lay sweating across her bed mouthing in whispers the sounds of Mr. Dickens’s narrative. . . . She was determined to learn the book so well that she would be able to read it aloud to Charlie someday. (*Lyddie* 83)

やがて彼女は、自力で小説を読み返し、リテラシーを獲得して、自分の考えを言語化できるまでに成長する。そのハイライトは、セクハラ行為を働いたマーズデン氏に防火用水を浴びせたことで彼女の“moral turpitude”が問題視され、解雇を言いわたされる出来事である。リディは“turpitude”の意味を知らないために、その場で抗弁できず悔しい思いをする。そこで、彼女は、辞書を買ひ、“turpitude”の意味を調べたのち、逆にマーズデン氏の“moral turpitude”を問責して抗弁する。

“I ain’t a beauty to look at. But I am not vile, shameful, base, or depraved!”  
... “You accused me of moral turpitude, Mr. Marsden. I am here to say I am not guilty.” ... “Mrs. Overseer Marsden. I figure she ought to know if there is moral turpitude occurring in her husband’s weaving room.” (173-74)

こうして、リディは、ベッツィの影響下でリテラシーの獲得をとおして、セクハラを断罪する「声」をあげ、みずからの主体性を主張するのである。

### 女性同士の連帯

このフェミニズム小説で、リディは、二つの女性の共同体のなかでシスターフッド姉妹愛を育み成長してゆく。一つは、カトラー旅館で料理女トリフェーナと結ぶ人間関係であり、もう一つは、紡織工場やその寮で同僚の女工やルームメイトらと結ぶ人間関係である。すでに述べたように、トリフェーナは「蹴りつづける蛙」の話をとおして、リディに苦境を生き抜く活力を与える。第二の女性共同体で、労働運動をする先輩の女工ダイアナやベッツィたちは、交流を通じて、仕事中毒のリディに人間らしい感情を取りもどさせる役割を担う。リディは、アイルランド移民のブリジッド (Brigid) が後輩として職場に入ってきたとき、当初は移民への差別感情を抱き、彼女に仕事を教えることに苛立ちを隠せない。し

かし、ダイアナの導きで一人前になれたリディは、やがて人間らしい心に立ち返り、ブリジッドに仕事や読み書きを教え、独り立ちを助ける良き先輩格の女工に成長してゆく。“It is . . . nature of slavery to make the slave fear freedom.” (69) というダイアナの言葉や、“We’re all working like black slaves, is what [possessed us].” (91) というベッツィの言葉は、やがてリディの次の認識につながってゆく。“It ain’t right for this place to suck the strength of their youth, then cast them off like dry husks to the wind.” (113)

また、リディは、ベッツィが弟の大学教育のために過酷な労働に耐え、結局は肺を病んで、大学進学を断念するのをみて、彼女の夢を引き継ぐことになる。“Ah, if only our sexes had been reversed! Imagine him putting *me* through college.” (102) とのベッツィの言葉は、この小説での結末部で、ルークの求婚を退け、まずオーバーリン大学に進学するリディの決心につながる。

このように、リディは女性共同体での姉妹愛に満ちた言説に支えられて、自己主張の「声」を獲得し、自立に向けて成長するのである。

### フェミニスト的主体構築の破綻か？

ところが、すでに述べたように、強力なフェミニズム小説『ワーキング・ガール』の最後の二章において、リディのフェミニスト的主体構築に、ある種の曖昧さ、弱さがみられるとの批判がトライツによってなされている。その問題となるのは、すでに述べた、ルークとの別れの場面の一節である。

I’m off . . .” she said, and knew as she spoke what it was she was off to. To stare down the bear! *The bear that she had thought all these years was outside herself, but now, truly, knew was in her own narrow spirit.* She would stare down all the bears! (181, 強調は筆者による)

トライツによれば、リディの発話に映し出される思想的メッセージは、問題の

所在を社会や制度にではなく、犠牲者となっている少女に求める「犠牲者非難」の考え方であり、リディ個人の欲望が文化的要望と妥協したフェミニズムの破綻を表す、というのである。すなわち、彼女が外在的問題との対決から内在的問題の解決へとシフトする点で、彼女の発話には、ヘテログロッシアがモノグロッシアに変化するというめずらしい事例がみられ、作品が書かれた1990年代アメリカのフェミニズム運動内の混乱や自己分裂を反映している、というのである (Trites, "Feminist Dialogics" 50-51)。

しかしながら、1990年代アメリカのフェミニズム運動内の混乱を反映するという議論には、少々無理があるように思える。リディはさまざまな性差別的勢力——家父長的な経済システム（女工の搾取労働）、制度的に許容された性的嫌がらせ（マーズデンのセクハラ行為）、強制的異性愛結婚（家の買い取りとセットにリディに求婚したルーク）——と十分闘ってきたわけで、一時、敗北宣言をするが、屈服したわけではなく、リディのフェミニスト的主体構築が破綻していると結論づけられない。

本稿はむしろ、リディのフェミニスト的主体構築にある種の曖昧さ、弱さがみられ、それは、本来、男性中心的な教養小説の様式内で、ポストモダンのフェミニズム小説『ワーキング・ガール』が物語られた結果、主人公リディの主体構築に矛盾が生じてしまったためだと考える。教養小説は、近代的成長を所与のものとして成立し、主人公は、結末部で、仕事や結婚に象徴される人格の成熟・成長を成しとげ、近代の諸制度に参入することになっている。他方、フェミニズム小説としての『ワーキング・ガール』は、ルークとの友愛的結婚を視野に入れながら、大学教育を通してキャリアの確立を求め、内面的な成熟に向かうところで結末を迎える。続編の『北極星を目標として—ジップの物語』(Jip, His Story, 1996) を読めば、私たちは、オーバーリン大学卒業後に帰郷して学校の教員として自活し、奴隷解放運動に参加するリディの成長した姿に出会う。つまり、教養小説とフェミニズム小説との間に、少女の成長に関して、概念上のずれが生じているのだ。教養小説では、少女の成長は、たとえば、『若

草物語』(*Little Women*, 1868) の主人公ジョー・マーチ (Jo March) の表象にみられるように、近代的結婚制度の良妻賢母役割への回収という道筋がついている。それは、少女が結婚制度とはかかわりなく精神的経済的自立を獲得するという、ポストモダンのフェミニズム小説で描かれる成長の概念とは異なる。

さらに、物語論の観点からみると、ジェラルド・ジュネット (Gérard Genett) が「内的固定焦点化」の物語と呼ぶタイプのこの作品で、焦点人物は、語り手に比べて「視野の制限」を受ける (『物語のディスコース』222)。20世紀末のフェミニスト作家パターソンは、三人称の語り手として、19世紀前半に生きるリディを焦点人物として物語るために、結末部でのリディの重要な意思決定において、「視野の制限」という問題を解消できない。言いかえれば、少女の成長に関する考え方のずれは、語り手／作者と焦点人物／リディとの位相のずれでもある。リディは、19世紀人としてこの矛盾を直感的に感じることはできても、ポストモダンの思考で矛盾を裁断する「声」をあげるのは難しい。

その典型例は、結末部での求婚者ルークへのリディの対応にみられる。かつて、ルークがウォーセン家の農場を買い取ったので、リディを妻として迎えたという手紙をよこしたとき、リディは、自分は売り物ではないと激怒して、この手紙を破り捨てたことがあった。19世紀人として「視野の制限」を受ける焦点人物リディは、家の買い取りとセットで求婚するルークから恩義を施されまいとして、反感を抱くのである。一方、ポストモダンのフェミニスト作家パターソンは、リディにルークのプロポーズにみられる家父長原則に反発させる。作者／物語の語り手は、ルークの期待する良妻賢母の役割に回収されまいとリディを抵抗させ、リテラシーと姉妹愛によりエンパワーメントを得た彼女に、結婚制度の隷属状態に陥らないよう用心深く振る舞わせる。

リディは、オーバーリン大学から「弱くない」「奴隷でない」自分となって戻ってきた暁には、ルークとの友愛的な結婚もありうるし、古い結婚から新しい結婚への跳躍もありうるという意味で、“We can stil hop, Luke Stevens” (182) とつぶやく。この “hop” は、自由への跳躍であるが、リディにとっては、ジェ

ンダー役割の罫から自由な女性の生き方への跳躍ということになる。オーバーリン大学進学を決意したりディに向かって、保守的な男性ルークは、“Thee is indeed a wonder, Lyddie Worthen.” (181) と驚嘆の気持ちを表す。19世紀前半の家父長家庭出身のルークにとって、この言葉が精一杯の反応なのだろう。だが、“wonder” は、実際のところ、パターソンの表象物としてのリディに向けられたものであるに違いない。近代人のルークにとって、ポストモダンのフェミニスト作家パターソンの描写は“wonder” としか言いようのないものなのだろう。

## むすび

キャサリン・パターソンのフェミニズム小説『ワーキング・ガール』は、歴史小説として企画され、教養小説の様式をもつ作品である。しかしながら、トライツの指摘にあるように、結末部で少女の意思決定に曖昧なフェミニズムがみられ、本稿は、その原因をめぐる議論を始めた。トライツは、曖昧なフェミニズムの原因が、作品発表当時の1990年代アメリカにおけるフェミニズム運動内の混乱や内部分裂にあると考える。本稿は、この考えに反論して、以下のような順序で『ワーキング・ガール』の検証と分析を行った。まず、この作品が男性中心的な伝統的教養小説とどのように異なるのかを検証し、次に、作者が作品全編を通じて、多様な表象を用いて主人公リディの成長を描き、強力なフェミニストの主体を構築する過程を検証・分析した。

以上の論考の結果、作品の結末部での曖昧なフェミニズムは、1990年代当時のフェミニズム運動の混乱を反映するというよりも、少女の成長に関して、伝統的教養小説の考え方と、フェミニズム小説『ワーキング・ガール』のそれとの間のずれに起因していると考えられる。あるいは、物語論の観点からは、「内的固定焦点化」の物語である『ワーキング・ガール』において、焦点人物リディが「視野の制限」を受けており、第三者語り手／作者が、少女の成長や自立に関して、焦点人物と位相のずれを解消できないために、曖昧なフェミニズムと

いう現象が生じてしまった、と考える。

#### 注

- 1 Cf. Sara Smedman, " 'In God's Delightful Company': Katherine Paterson's Feminist Theology" 226.
- 2 「語りの焦点（視点）になる人物。語り手と同一とは限らない。たとえばH・ジェイムズの『メイジーの知ったこと』（1897）では、物語は幼いメイジーの意識をとおして語られる、つまり語りの焦点はメイジーにあるが、語り手はメイジーではない」（川口喬一・岡本靖正編『文学批評用語辞典』139）。
- 3 Roberta S. Trites は、『宇宙をかきみだす』（*Disturbing the Universe*）で教養小説としての『ワーキング・ガール』を詳しく分析している。
- 4 Cf. Trites *Disturbing the Universe* 29.
- 5 「幸いなる過ち」とは、アダムの原罪がキリストの人類救済の契機であるから幸いである、という考えである。
- 6 Laura Mandell Zaidman の研究は、この小説の背景の歴史的正確さを立証している。Cf. Zaidman, "Historical Authenticity of *Lyddie* and *Jip, His Story*."
- 7 Cf. Benita Eisler, *Lowell Offering* 161.
- 8 1837 Oberlin College Bulletin 3, 6-7 <[http://www.oberlin.edu/archive/resources/1937 Bulletin/](http://www.oberlin.edu/archive/resources/1937Bulletin/)>.
- 9 Cf. Natalie Babbitt, "Working Girl."
- 10 Cf. Benson, "We Can Still Hop" [sic]: *Lyddie* and *Jip, His Story* as Literacy Narratives" 87-107.

#### 参考文献

- Alcott, Louisa May. *Little Women*. 1868. Puffin Books, 1953.
- Altbach, Edith H. *Women in America*. Lexington, Mass.: D.C. Heath & Company, 1974.  
[イーディス・H・アルトバック『アメリカ女性史』新潮社、田中寿美子他訳、1976年。]
- Babbitt, Natalie. "Working Girl." *New York Times Book Review*. May 19(1991):24.
- Benson, Linda. "We Can Still Hop" [sic]: *Lyddie* and *Jip, His Story* as Literacy Narratives." *Bridges for the Young: The Fiction of Katherine Patterson*. Lanham, Maryland: Scarecrow, 2003.



- Buckly, James. *Season of Youth: Bildungsroman from Dickens to Golding*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1974.
- Bulletin of Oberlin College*. 20 Mar. 1937. 2 Sep. 2008. <<http://www.oberlin.edu/archive/resources/1937Bulletin/>>.
- Dickens, Charles. *Oliver Twist*. 1838. Penguin Books, 1994.
- Eisler, Benita. *Lowell Offering: Writings by New England Mill Women (1840-1845)*. New York: W.W. Norton & Company, 1977.
- ジュネット, ジェラルド. 『物語のディスコース—方法論の試み』 書肆風の薔薇, 花輪光・和泉涼一訳, 1985年.
- 川口喬一・岡本靖正編. 『文学批評用語辞典』 研究社, 1998年.
- Paterson, Katherine. "Historical Fiction: Some Whys and Hows." *Booklist*. 95. 15. Apr. 1. (1999):1430. *Literature Resource Center*. Gale. Kobe College. 14 Aug. 2008 <<http://go.galegroup.com/ps/start.do?p=LitRC&u=81kobwom>>.
- . *Jip, His Story*. Puffin Books, 1998. [キャサリン・パターソン『北極星を目指して—ジップの物語』 岡本浜江訳, 偕成社, 1998年.]
- . *Lyddie*. Middlesex, England: Puffin, 1991. [キャサリン・パターソン『ワーキング・ガール—リディの旅立ち』 岡本浜江訳, 偕成社, 1994年.]
- Pratt, Annis. *Archetypal Patterns in Women's Fiction*. Bloomington: Indiana UP, 1981.
- Smedman, Sara. " 'In God's Delightful Company': Katherine Paterson's Feminist Theology." *Bridges for the Young: The Fiction of Katherine Patterson*. Lanham, Maryland: Scarecrow, 2003.
- Trites, Roberta Seelinger. *Disturbing the Universe: Power and Repression in Adolescent Literature*. Iowa City: Iowa UP, 2000. [ロバータ・シーリング・トライツ『宇宙をかきみだす』 吉田純子監訳, 人文書院, 2007年.]
- . "Feminist Dialogics in Katherine Paterson's Novels." *Bridges for the Young: The Fiction of Katherine Patterson*. Lanham, Maryland: Scarecrow, 2003.
- White, Barbara A. *Growing Up Female: Adolescent Girlhood in American Fiction*. Westport, Connecticut: Greenwood P, 1985.
- Zaidman, Laura Mandell. "Historical Authenticity of *Lyddie* and *Jip, His Story*." *Bridges for the Young: The Fiction of Katherine Patterson*. Lanham, Maryland: Scarecrow, 2003.

## Summary

# Ambivalent Feminism in Katherine Paterson's *Lyddie*

YOSHIDA Junko

Katherine Patterson's historical Bildungsroman, *Lyddie* (1991), set in 1840s Vermont and Massachusetts, America, is one of her most powerful feminist novels for adolescents. Through the protagonist, Lyddie, as a focalizer, and various metaphors, the author narrates how the girl constructs her feminist subjectivity. However, a close reading of the novel, especially toward the end of it, reveals a certain ambiguity in the construction of the girl's subjectivity: her recognition that the fearful bear is not outside but in her "own narrow spirit." Roberta Trites attributes Patterson's ambivalent feminism mainly to the feminist ideological inconsistency, including Patterson's own, in 1990s America.

To disprove Trites' argument, I examine the discrepancy between James Buckley's male-centered concept of Bildungsroman and Patterson's Bildungsroman. In Buckley's Bildungsroman, only male protagonists reach maturity and gain success, whereas female protagonists end up choosing, as Anis Pratt criticizes, between "secondary personhood, sacrificial victimization, madness, and death." This type of unhappy ending, however, is not the case with Lyddie. She reaches maturity, and has prospects of getting a college education as well as marriage.

To construct the protagonist's feminist subjectivity, the author uses various metaphors: a threatening bear, a frog jumping for survival, and a slave struggling for freedom. Also, the protagonist's consciousness is raised through discourse in the female community of the spinning mill: her acquisition of literacy and decision to go to college. Furthermore, she fights with the overseer

who sexually harasses female workers.

Despite all of the above, Patterson ends the novel with ambivalent feminism, which, I argue, is mainly due to the inconsistency in the conception of female growth between the male-centered Bildungsroman and postmodern coming-of-age novel narrated by the feminist-minded author. In view of narratology, focalizer Lyddie's sense of female growth fails to accommodate itself to that of the third-person narrator.